

三浦市遊ヶ崎遺跡調査概報

* 浜 田 勘 太
** 神 沢 勇 一

一
遊ヶ崎遺跡は、城ヶ島北岸に突出した遊ヶ崎と呼ばれる舌状低台地の基部にある。

本遺跡は昭和三十三年に発見され、須和田式土器とみられる土器が出土した。しかし、それは壺形土器においては、須和田式土器本来のそれとの間に、ほとんど差異が認められないが、煮沸形態においては明瞭な性格的差異があり、一型式(城ヶ島式土器)として区別されるべきものであった。^(注1) しかも、この煮沸形態の差異は、二者の間における時間差によるものではなく、それらの成立の基盤が

異なることに起因すると考えられ、さらにその検討の必要を生じたのである。

しかしながら、かかる注目すべき土器の出土にもかかわらず、遺跡の性格については、これが偶然の発見であるため、ほとんど不明であった。そこで資料の蓄積と遺跡の性格把握を目的として、昭和三十七年七月十四日に小発掘をおこなった。本調査は横須賀考古学会の研究の一部をなすもので、赤星直忠・浜田勘太・山中信夫・斎藤彦司・小川裕久・地元有志および神沢勇一(担当者)が参加した。稿を起すにあたり、援助を頂いた諸氏に厚く感謝する次第である。



第 1 図
三浦市遊ヶ崎遺跡位置図

二
遺跡は三浦市三崎町城ヶ島字遊ヶ崎三七五番地(土地所有者 青木庄九郎)に属し、現在大部分が畑地に

なっている。ここは、明治年間に、もとの付近にあった小台地の一部を削平した部分と、さらにその土を砂地に盛土して造成された部分から成っているが、その境界は明らかでない。なお畑の西側には、かつての台地の残部（畑面との比高2 m）がある。

発掘は、以前に土器が発見された地点を中心に設定したAトレンチ（南北方向2 m×20 mと、その北端から北西8 mの地点に設定したBトレンチ（2 m×2 m）によっておこなった。

Aトレンチにおける層序は、表土（Ⅱ耕作土・一五——二〇 cm）、黒色有機土層（二〇——三〇 cm）、貝殻小片を含む黄色砂層（四〇——五〇 cm）、岩盤となっている。遺物は表土から黄色砂層直上にかけて、土師系の素焼土器と弥生式土器の小片がまばらに出土したが、表土と有機質土層は全く攪乱状態を示しており、明治時代以後の陶器片等も含まれている。攪乱は部分的に黄色砂層上部にも及んでいるが、この層は安定しており、攪乱個所以外では、有機土層との境に不自然な明瞭さがある。したがって畑地造成の事情と併せて考えれば、この部分は盛土した部分で、以前に発見された土器は、土に混じて運ばれ、二次的に出土したものと考定される。

Bトレンチは、もとの台地の残部である西側高所の北裾にあたり、遊ヶ崎基部の西縁斜面にかかっている。この地点の層序は黒色有機土層六〇 cm）、岩盤となっており、表面下二〇 cmまでに比較的良好な破片が多少出土したが、包含層とみられる状態は全くなく、近代のものと混在していた。ここには、以前から畑の石片、廃物等を捨てていたと言われているので、本地点出土の土器片も、また一次的な存在とは考えられない。

三

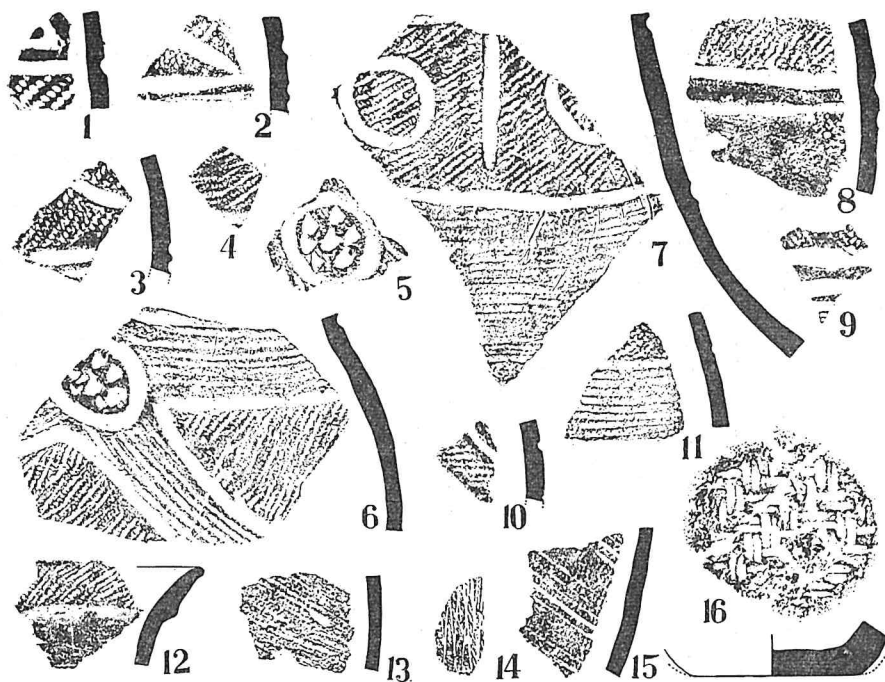
出土遺物はすべて土器破片で、弥生式土器と土師系の素焼土器の二種が認められる。それらは、A・B両トレンチにおいて、二次的な出土状態を示すうえ、量的にも少ないので一括してとりあげることとした。

土師系素焼土器

盤形で、ぶ厚い糸切底をもつ小形土器の小破片が八例ある。おそらく直径一〇 cm前後の小形土器で、いわゆるかわかけの類と考えられるが、詳細は明らかでない。

弥生式土器（第2図）

型式的には単純で、すべて城ヶ島式土器に属する。器形には壺形と甕形の二種類が認められる。



第2図 三浦市遊ヶ崎遺跡出土土器 縮尺約 $\frac{1}{2}$
(1~11 壺形土器・12 甕形土器・13~16 器形不明)

壺形土器 (1—11) —— 器形は長頸・長胴を呈するものと考えら

れ、文様は太い匏描き沈線と粗い縄文によって構成されている。10一例をのぞく他は、前報告で壺形土器一類としたものに一致している。10は曲線的な磨消縄文をもつことによって、壺形土器二類に含めて支障ないであろう。いずれも粘土中に小石の含有が多く、また大部分に雲母の混入が認められる。色調は黝黒色・暗褐色・灰褐色等まちまちである。

1・2は重三角文をもつ破片である。5・6は地文としての縄文の上に沈線でX字形の区画を描き、その中に条痕で充たし、Xの交点に刺突文で埋められた円文を配している。この種の文様は秦野市平沢遺跡出土の須和田式土器に類例がある。^(註3) 8・9は胴部破片で、沈線内と無文部分が丹彩されている。

甕形土器 (12) —— 甕形土器と確認しうる破片は本例のみである。口縁は複合口縁状で外側に縄文が施文され、頸部は研磨されている。粘土中小石を含み、色調は灰褐色をおびる。前報告の甕形土器一類に属するものである。

器形不明の破片 (13—16) —— 壺形土器または甕形土器の胴部破片と考えられるもの数片と底部破片が一例ある。胴部破片には器面に斜行条痕をもつものと、その上を更に匏で研磨したもの (12) とが認められる。底部破片には網代圧痕がある (16)。

四

遺跡ならびに出土遺物の概略は前項に述べたとおりである。

調査の主目的である遺跡の性格については、今回の発掘では確認することが出来ず、わずかに今まで発見された土器が二次的な出土品であったことが判明したにすぎなかった。しかし、問題の畑地は、その西側に残存している高所の続きを削平した土で造成されたものであり、他所から土の搬入された事実はないので、遺跡・遺物の原位置は遊ヶ崎基部の西半部（それも至近距離）に存在したことは誤りないと言えよう。

出土遺物は少量であるが、そのうち、副産物的に出土した土師系素焼土器は城ヶ島における

南関東地方弥生式土器編年試案		
	相模湾西部	東京湾周辺
後 期	+ ((千 代))	前 野 町
	+ ((千 代))	弥 生 町
	+ ((千 代))	久 ケ 原
中 期	仙 石 原	宮 ノ 台
	中里(須和田)	城 ケ 島
	堂 山	三 ケ 木

+ (()) は型式名をあたえていないもの、(()) 内の名称は遺跡名。

最初の出土例として注意される。

弥生式土器については、すべて城ヶ島式土器に属するもので、既に出土している土器との間に差異は認められず、わずかに丹彩された甕形土器破片二例の出土が注意されるのみである。つぎに、須和田式土器と城ヶ島式土器の差異の中心である煮沸形態については、本調査においても、須和田式土器に特徴的な横走羽状条痕文をもつ粗製鉢形土器の出土はなく、これに対して、甕形土器一類はさらに一例の増加を見、計三個体となった。したがって、城ヶ島式土器の煮沸形態は、前報告で述べたように、縄文・沈線文・櫛目文等で装飾された半精製の甕形土器一・二類によって構成されと考えられ、この煮沸形態における差異は須和田式土器と城ヶ島式土器を区別する特徴とみることが出来る。また、城ヶ島式土器の分布については、その後も他遺跡出土例がないが、須和田式土器が貝田町Ⅰ式土器の系統をひく堂山式土器を基盤として、その分布圏内（相模川以西）に成立することは既に明らかであり、一方城ヶ島式土器が同じく貝田町Ⅰ式土器の系統をひく三ヶ木式土器を基盤として成立することは確実とみられるから、おそらく三ヶ木式土器のあとをうけて相模川以東の地域に分布をもち、須和田式土器と平行的關係にあるものと考えられる。^(註6)

(文 責 神 沢)

(* 神奈川県立三崎高等学校)

(** 日本考古学協会)

註

- (1) 浜田勘太・神沢勇一「三浦市城ヶ島出土の弥生式土器」横須賀市博物館研究報告（人文科学）第五号（一九六一年）。
- (2) 註1文献参照。
- (3) 亀井正道「相模平沢出土の弥生式土器に就いて」上代文化二五集（一九五五年）。
- (4) 神沢勇一「足柄上郡山北町堂山出土の弥生式土器」神奈川県文化財調査報告二七集（一九六二年）。
- (5) 神沢勇一「津久井町三ヶ木出土の弥生式土器」神奈川県文化財調査報告二六集（一九六〇年）。
- (6) 従来説かれている須和田式土器の形式的特徴を備えたものの分布は相模川以西に限られ、また相模川以东には城ヶ島式土器が分布するとすれば、須和田式土器とされていたものは小田原市中里遺跡出土土器をもって代表させ、これと城ヶ島式土器を「南関東地方における貝田Ⅱ式土器」として一括した場合にのみ須和田式土器の名称を使用した方が適當かもしれない。